

## 環境科学部

### 環境生態学科のこの一年

伴 修平

環境生態学科長

#### 学生の動向

2015年4月には32名の新生を迎えることができた。2016年3月16日現在、欠員はでていない。2年生と3年生はそれぞれ30名と29名が在籍しており、4年生はつい先日29名が無事卒業した。5年生以上は3名で、2年生以降には2名の休学者がある。アベノミクス効果なのか、近年の就職状況は好転しているようで学生の就職率は期待以上に良かったが、会社訪問の解禁が夏以降に変更されたことによる混乱は避けられなかった。来年度はまた元通りになるとのこと。就職事情の混乱はまだまだ続くようである。

#### 教員の動向

2016年3月には永淵修教授が定年退職された。長年続けられてきた越境汚染の研究は、退職後も続けられるとのこと。大気汚染の研究は今後ますます重要になってくるだろう。さらなるご活躍をお祈りしたい。一方、本年度は、2名の新任、小泉尚嗣教授と吉山浩平助教を迎えることができた。それぞれ、防災学と数理生態学がご専門で、これまでの生態学科にはなかった新しい風を吹き込んで頂けるものと期待している。また、2016年4月には丸尾准教授が教授に昇進される。こちらにも新しい求心力として学科を牽引して頂けるに違いない。

#### 学科の動向

本年度は、特に大きな出来事はなかったが、B3棟およびB4棟外周と廊下の不要物品を一扫できたことは大変喜ばしい出来事だった。不要な物品とはシステムティックに処分されないが故に蓄積されてしまう厄介者で、それをおける場所があれば必然的に増えてしまう不都合な真実でもある。環境科学部なのだから、これは大変遺憾なことであった。建物外周のゴミは見てくれを低下させ、廊下に放置された物品に至っては防災的な観点に立っても即座に撤去されるべきものだった。いま、過去20年間の悪しき蓄積はようやく一扫されつつある。やれやれ。しかし、言われてから実行に移したのでは、こどもである。言われなくとも常に整理整頓できる大人になりたい。

少子化が叫ばれて久しい。大学運営も徐々にまま

ならぬものになって行くのか。もはや象牙の塔に閉じこもっているわけにはいかないとことだろう。個人的には応用研究だけが社会貢献に必要とは思わない。研究者以外の人にも容易に説明可能であれば、基礎研究も十分に大切と思う。ただ、独りよがりにならないことは重要で、必要とされることを真摯に実行することが、おそらく社会貢献にもつながり、本学の認知度を高めることにもなるのだろう。精進したいです。

### 環境政策・計画学科のこの一年

上河原 献二

環境政策・計画学科長

2015年度は例年になく少ない教員で対応した変化の多い年であった。まず、4月に41名の新入学者を迎えた。内訳は、推薦8名、前期一般22名、後期一般11名であった。また、①環境計画、環境システム、リサイクル、②環境負荷削減政策、③環境教育を研究されている和田有朗准教授が着任された。

2014年度末に明らかになった経理上の事案を学科としても重く受け止めて、関連する改革を行った。具体的には学科教員が長期出張を基本的に避けるべき期間の設定、卒業研究指導における複数指導制の一層の強化などである。また、2015年度は、諸般の事情から、かなりの人数の新4回生の研究室配置換えがあった。

2014年度に引き続き、2015年度も、学科広報に力を入れた。その柱は、学科ホームページの充実とオープンキャンパスの強化であった。学科ホームページには、2014年度に引き続き、毎月交替で教員がコラムを掲載した。学科教員の姿が高校生にも見えるようにとの努力である。また、オープンキャンパスでは、初めてB0棟学生ホールを会場とした。会場デザイン・設営者の努力もあって、見栄えのものとなった。主な内容を三つ紹介する。第一に、2014年度から引き続き、「そうだったか!『もののけ姫』が挑んだ環境問題」と題して、学科教員それぞれの専門から『もののけ姫』を読み解いた内容を紹介する特別講義を行った。第二に新しくミニ環境フィールドワークを行った。犬上川河口に高校生を引率して、河口の砂州から琵琶湖の景色を見てもらい、また侵略的外来植物ナガエツルノゲイトウの抜き取りを体験してもらった。第三は、室外スペースも活用してコーヒー等を提供しながら在学生在が高校生と話す「カフェ」であった。在学生在、卒業生の協